

戦争論から「秘密のドイツ」へ¹

—エルンスト・ユンガー『総動員』における無名兵士崇拜 批判について—

糸瀬 龍

1. はじめに

本稿は、エルンスト・ユンガー (Ernst Jünger, 1895-1998) のエッセイ『総動員』(Die totale Mobilmachung, 1930)²を、従来この作品に向けられてきた評価とは異なる角度から読解し、分析を試みるものである。その際、作家の著作集および全集への収録の際に削除された部分に書かれていることを、これまであまり明らかにされてこなかった作品『総動員』のもうひとつの核心として捉えることから出発する。その核心は、『総動員』がこれまで現代戦争についての論考として評価を受けてきた点とは異なるところにある。このエッセイでユンガーが展開する無名兵士崇拜に対する批判こそは作品としての『総動員』の要素として必須だと本稿は考える。そしてユンガーの展開した批判には解明の余地がいまだ残されていると思われる。この考察のための構成は、本稿および続稿をもって全体をなす。まず本稿においては、従来の『総動員』理解を点検することから始めることとする。

¹ 本稿は、「第1回中央大学文学研究科ドイツ語文学文化専攻・首都大学東京人文科学研究科ドイツ文学教室合同コロキウム」(2017年7月27日、於・中央大学多摩キャンパス)および「第114回トーマス・マン研究会」(2018年1月8日、於・福岡大学)での研究発表の原稿の一部を大幅に加筆したものである。二度の口頭発表の際、会場でご指摘とご意見をお寄せ下さった方々に感謝申し上げる。

² Ernst Jünger: Die totale Mobilmachung. In: Ders.: Politische Publizistik 1919-1933. Hrsg. v. Sven Olaf Berggötz. Stuttgart (Klett-Cotta) 2001 [1930], S. 562. 以下本稿において『総動員』の引用は、初版のかたちで収録された上記 Politische Publizistik 1919-1933. から行ない、別途明示しない限り本文中の丸括弧内に PP の略号と頁数を表記する (例: PP, S. 58)。

2. 作品『総動員』の核心と戦争用語としての「総動員」

80 年近くにおよぶ著作活動が生み出した数多くの作品の中でも、エッセイ『総動員』は、ユンガーの著と目されてきた『労働者——支配と形姿』(Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt, 1932) に次いでこの作家の名とともに語られることの多い作品である。ユンガーの作品全体を概観するとき、1930 年のエッセイ『総動員』は、この作家の作品史においてとりわけ重要な地位を占める。このことは「総動員」という用語が現在われわれの生活にいかに浸透しているかを考えてみても明らかである。元来は軍事用語であった「総動員」が、たとえば、「ここはぜひわが社の持てる力を総動員して……」などのように使用される場合を考えてみればよい。ただ「総動員」という用語をめぐる注意すべきことがある。日本語でこそ「総動員」は一語である。しかし、第一次世界大戦の開戦時においてもなお、軍隊への兵員の動員とはそれまで使用されてきた *die allgemeine Mobilmachung* であった。これが、ユンガーの造語であるとされる *die totale Mobilmachung* の意味において「総動員」と言うときとは異なる意味合いであることについて注意を払わねばならない。³一般兵役動員(すなわちある年齢以上の青年・壮年男子の軍隊への「動員」)の意味での *die allgemeine Mobilmachung* と区別するために、*die totale Mobilmachung* にはこれまですでにさまざまな訳語が検討されてきた。それらはあるいは「全面的動態化」や「全体的動員」であり⁴、あるいは「総体的動員」や「超動員」などである。⁵しかし日本語として「総動員」という術語を考える際考慮せねばならないことは、1938(昭和 13)年第一次近衛内閣により「国家総動員法」が施行されていることである。この法における「総動員」の意味合いにはすでに、ユンガーがエッセイ『総動員』において分析した、第一次世界大戦における物的資源や人的資源の全国的調達過程が視野に入っているのである。「国家総動員法」が、ユンガーが『総動員』において分析した動員様態にかなうものになっていたかを確認するために、この法のなかで現在「総動員」としてもっとも了解されやすいと思われる条文をここで見ておこう。この法の特質をもっともよ

³ Vgl. Kiesel 2009, S. 374. ユンガーがその形容として *total* を提出する以前、従来 *Mobilmachung* というときには *allgemein* が前提されていたのであり、とくに形容詞を付す必要はなかった。第一次世界大戦勃発時にドイツ皇帝は「動員令」„*Mobilmachungsbefehl*“ を発布した。

⁴ エルンスト・ユンガー(川合全弘訳)「総動員」、『ユンガー政治評論選』、月曜社、2016 年、115 頁。

⁵ 有田英也「戦争の世紀とモダニズム」、小森陽一(編)『岩波講座 文学 10・政治への挑戦』、岩波書店、2003 年、179—201 頁、ここは 201 頁。

く表していると思われる第一条および第八条は次のような規定となっている。

国家総動員法〔昭和十三年四月一日法律第五十五号〕

第一条 本法ニ於テ国家総動員トハ戦時（戦争ニ準ズベキ事変ノ場合ヲ含ム以下之ニ同ジ）ニ際シ国防目的達成ノ為国ノ全力ヲ最モ有効ニ發揮セシムル様人的及物的資源ヲ統制運用スルヲ謂フ

第八条 政府ハ戦時ニ際シ国家総動員上必要アルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ物資ノ生産、修理、配給、譲渡其ノ他ノ処分、使用、消費、所持及移動ニ関シ必要ナル命令ヲ為スコトヲ得⁶

日本ではこの「国家総動員法」によって、昭和13年、1938年にいたって政府があらゆる「人的及物的資源ヲ統制運用スル」ことができ、政府に「必要アルトキハ」いつでも「物資ノ生産、修理、配給」その他一切に関わる命令を下すことができる体制が構築された。すなわち、この時点ですでに、日本語の術語としての「総動員」は、ユンガーの *die totale Mobilmachung* の意味を十分汲み取っていたのだと判断できるのである。国家総動員法は、すでに第一次世界大戦で予感され、やがて来たるべき戦争形態だと考えられた総力戦のための動員を目指したものであるのだ。⁷そして、ユンガーの考察した「総動員」を理解

⁶ 『国家総動員法第1巻』（底本：企画院（編）『国家総動員法令集』、日本図書センター、1989年、25頁および27頁。旧字は新字にあらためた。

⁷ 昭和の国家総動員（法）において興味深いのは、この法が統帥権干犯に抵触するとして難色を示す向きがあったことである。「国家総動員法は絶対主義的天皇制のファシズムの変質を示す法的指標でもある。それは同法成立時の議会が、むしろ主として天皇大権や枢密院諮詢権限の干犯を理由として「違憲」の論陣をはったこととかわわっている。たしかに政党のこの論難はある意味で正確であって、同法によって、大日本帝国憲法の天皇大権・緊急勅令など非常事態条項は、人的物的資源の総動員条項に置き換えられたのである。」（本間茂樹「解説」、『国家総動員法』第1巻、3-4頁）これに関連して、内田源兵衛は同法が布告された直後、次のように解説している。「尚お国家総動員は、一般行政権の作用であつて、兵力の行使即ち統帥大権の作用を含まないことは、制度上明白であつて、外国の総動員法規とは、この点に於いて異なることを注意するを要する。」（内田源兵衛『逐條解説 国家総動員法（増補）』、日本評論社、1939年、26-27頁。旧字は新字にあらためた）内田の述べていることは正しく、国家総動員法は経済的・物資的動員をその主柱とし、政治的規定をほとんど含まない。企画院作成の原案時点ではあった「集会の禁止」や「ストライキ等争議の禁止」などは原案から削除されるか、勅令が制定されなかった。この点でもナチス・ドイツの全権委任法とは性質を異にするのである（本間、前掲所参照）。注3で挙げたドイツ皇帝による動員令がいわば統帥大権の行使として軍事的動員に寄与するものである一方、国家総動員法による「動員」はもはや軍事的動員とは切り離されたところにある。であるから、*Mobilmachung* に付される形容の *allgemein* から *total* への移行を、国家総動員法は十分に汲んでいたのだといえよう。

するために重要なことはこの用語が、後述するように、第一次世界大戦についていえばその全部の期間に関わるものではないということだ。「総動員」は、戦線の膠着からやがてずるずると泥沼にはまり込んでいった後期の物量戦を勝ち抜くためにその達成が目指されたといえるだろう。ルーデンドルフ将軍(Erich Ludendorff, 1865-1937)の『総力戦』(Der totale Krieg)は、ユンガー『総動員』の発表から5年後、1935年の出版である。⁸

また、ユンガーよりも三歳だけ年長ながら、『技術的複製が可能な時代の芸術作品』はまだ世に問うていなかったものの『ドイツ哀悼劇の起源』をすでに刊行し批評家として名を売り出していたベンヤミンは、このエッセイをユンガーが発表した直後いち早く反応を示した(「ドイツ・ファシズムの理論」(Theorien des deutschen Faschismus, 1930))。このことを考えても、同時代人へ与えたインパクトの大きさという意味において、ユンガー作品史において重要な地位を占める作品であると判断してよいだろう。

本稿(および『総動員』における無名兵士崇拜批判を検討する続稿)では『総動員』が著作集および全集へ収録される際には削除された箇所を扱うことを冒頭に述べた。削除は、作家自身の手によって行なわれた。この削除部分についての本稿の判断をここで述べておきたい。削除された部分でユンガーによって表明された思想は、この作品の中心的価値であると現在見なされている箇所に劣るものではなく、この作品にとって本質的に重要な課題を担う部分である。さらには、この削除部分において披瀝された思想の内実は、1930年当時のユンガーの思想の核心のひとつと思われる。核心であったにも拘わらずその部分が

⁸ General Ludendorff: Der totale Krieg. München (Ludendorffs Verlag). ユンガーとルーデンドルフの関係はどのようであったか。1920年代後半、ドイツでは「ヴァイマル共和国」に反対する右派の諸勢力がしのぎを削っていた。これらは大別して三派に分類することができる。当時ベルリンの右派を代表する存在であったユンガーは後年この時代について、ルーデンドルフ、ヒトラーらのミュンヘン派は「もっとも浅薄な」派閥であったが、やがてこの一派が勝利することになったと回顧している。シュテファン・ブロイアーによれば、他に「ハンプルク・ナショナリストクラブ」(Breuer 2012: Carl Schmitt im Kontext, S. 202)が数えられる(Vgl. dazu auch Breuer 2012: S. 212 u. 243)。ユンガーの秘書を務めたアルミン・モラーによれば、ユンガーは後年この分類について好んで語り、ミュンヘン派に相対したときの自分たちが「ベルリングループ」に属するという意識があったようだ。それによれば、三派は、ナショナル・ボルシェヴィストの支柱と目されていたエルンスト・ニーキッシュ、そしてフリードリヒ・ヒールシャーおよびユンガーの「ベルリングループ」、ユンガーやカール・シュミットと親交のあったジャーナリストのヴィルヘルム・シュターベル、Deutsches Volkstumの編者であったアルブレヒト・エーリヒ・ギュンターとユンガーの『総動員』が収録された『戦争と戦士』に論考を寄せたゲルハルト・ギュンター兄弟の「ハンプルクグループ」、最後にヒトラー、ルーデンドルフの「ミュンヘン派」であるということになる。(Vgl. Mohler 1950: S. 102)

削除されたことには、この核心部分のはらむ危険性が関係している。では、核心部分とは何か。

第一次世界大戦によってヨーロッパは未曾有のカタストロフを経験することとなった。『総動員』は、その第一次世界大戦の特質を描き出した、すぐれた戦争論、戦争の観察になっているという評価を獲得してきた。『総動員』が収録された論集『戦争と戦士』(Krieg und Krieger)への書評においてユンガーら執筆陣への批判を展開したのは先にも挙げたベンヤミンである。そのベンヤミンも、ユンガーの弟フリードリヒ・ゲオルクら他の執筆者の論への評価に比べて、『総動員』における戦争の分析については低くない評価を与えている。同時代、また自国ドイツでの評価だけでは留まらない。本邦においても、翻訳があまり進んでいないといってよいエルンスト・ユンガーの作品のなかでも例外的に、『総動員』はすでに二人の訳者による翻訳が出されている。⁹こうした『総動員』受容(少なくとも20世紀までの)は、先に挙げた、戦死者についてユンガーがどう考えたかという背景とはほぼ関係なく成立してきたことも確かである。

事象としての「戦争」を取り扱う戦争論の領域を超えて、自分の同僚として第一次世界大戦の戦場で死んでいった「戦死者」をユンガーがいかにか考察したか。このことが『総動員』のもうひとつの核心である。この核心の検討に入る前に、『総動員』というエッセイが従来どのように読まれてきたのかを確認しておく必要があるだろう。

3. 『総動員』はどのように読まれてきたか

『総動員』はどの点を評価されて現在まで読み続けられてきたのか。一般に「総動員」という術語はつねに作家エルンスト・ユンガーの『総動員』という作品とセットになって語られている、ということは言えないと思われる。だが「総動員」という術語がユンガーのこのエッセイにおける意味でこんにちの私たちに了解されていることには、この作品の力が大きく与っている。ユンガーが編集した『戦争と戦士』に寄稿された各論に対していち早く反応を示したベンヤミンも、この論集に拠ったほかの論者とユンガーとを比較して、『総動員』には第一次世界大戦に対する洞察が含まれており、その洞察を無視することは

⁹ 田尻三千夫訳「総動員」『現代思想』1981年1月号、162-174頁、および川合全弘訳「総動員」、エルンスト・ユンガー(川合全弘編訳)『追悼の政治』、月曜社、2005年、35-79頁の2編がある。田尻訳には『総動員』のテキストの出典として初出である1930年の『戦争と戦士』(Krieg und Krieger)が挙げられているが、内容から判断して著作集版からの翻訳だと思われる。

できないという評価をこのエッセイに与えていることは先にも述べた。こうした受容において『総動員』は、20 世紀以降の現代戦争についての優れた洞察を含むものとして理解されてきた。『総動員』に対するこうした評価は、作品中のたとえば以下のような箇所を与えられてきたはずだ。

すでに先の戦争の終わりごろに予示されていた最新局面では、自分のマシンに向かう女性家内労働者のそれであれ、少なくとも間接的に戦争の機能に固有でない運動は、もはや生じえない。戦争当事者である産業国家を火山のような鍛冶場に変える、潜在的エネルギーのこのような絶対的把握において、第四身分の時代の幕開けが、ひょっとしたらもっともはっきりと徴候を示していたのかもしれない。——この、潜在的エネルギーの絶対的把握が、世界大戦をフランス革命の意義に少なくとも匹敵するほどの歴史的現象としたのだ。(PP, S. 562)

引用文中の「潜在的エネルギー-die potentielle Energie」は、『総動員』中で幾度か繰り返される言葉である。ユンガーによればこのエネルギーの把握は、第一次世界大戦において、しかも戦線が膠着状態に入ってから後期物量戦に突入して初めて着手された。またこの「潜在的エネルギー」の把握は、どの参戦国においても達成されたものではなかった。敵国に先駆け、国策としてそのエネルギーの把握、すなわち兵員勢力以外の人的資源、および物的資源を確保する体制を構築できた国は、日本で 1935 年に施行された国家総動員法にいうところの「物資ノ生産、修理、配給、譲渡其ノ他ノ処分、使用、消費、所持及移動」を第一次世界大戦の段階で政府が思うままにできた国は、ドイツではなくフランスであった。引用の後半部分に見られる「第四身分の時代の幕開け」という表現や、フランス革命に匹敵する歴史的意義を第一次世界大戦が担うなどとする箇所に注目すれば、第一次世界大戦を考察するにあたってユンガーの念頭にはつねに、自国ドイツの対立項としてのフランスがあったことは疑いない。『総動員』はこうした箇所の叙述から、いわば現代戦争を精緻に分析した「戦争論」としての評価を獲得してきたのだといえよう。

『総動員』がこれまでどのように読まれてきたかについて、上記に加えてさらに見るべき点がある。もう一点、従来多くの注目を集めてきたのは、このエッ

セイにおいて展開された「進歩 Fortschritt」概念の検討である。¹⁰ ユンガーは「進歩」を次のように分析する。「進歩」は、フランス革命後のヨーロッパにおいてめざましい伸張を遂げた。「進歩」は、従来の権威を失ったキリスト教の神に取って代わり、ついには「19世紀の大人民教会」(PP, S. 560)の地位に登りつめた。人類は漸進的に進歩してゆくのだという確信は、1789年以来疑うべき余地のない拠り所として、また装置となって、人々の信仰を獲得してきた。その「進歩」に疑いの眼差しが向けられるきっかけが第一次世界大戦の結果ヨーロッパにもたらされた事態であったのだ。「組織化された大量死」¹¹が「進歩」の帰結となって人類の前に立ちはだかることになる。この事態をうけて大戦の当事者であるヨーロッパ各国では「進歩」への懐疑が生まれる。しかし「進歩」の運動はその継続を止めない。戦後もさまざまに姿を変えてその運動は持続するのである。以下の引用箇所には、ユンガーが観察した第一次世界大戦後の「進歩」の運動の様子が描かれている。先に見た、第一次世界大戦のもうひとつの主要な側面、すなわち第四身分の時代の幕開けとしての第一次世界大戦の側面を明らかにしたことと並んで、このエッセイの重点のひとつといつてよい。

クレムリン宮殿の古きグロッケンシュピールに、インターナショナルのメロディが取って代わる。コンスタンチノーブルでは学童たちが、コーランの古いアラビア文字の代わりにローマ字をたどたどしく読む。ナポリとパレルモではファシスト警官が、南の生活のせわしない往来を近代的な交通秩序の原則によって整理する。世界のもっとも遠くのほとんどまだ伝説的な国々において議事堂が竣工される。ベルリンは、誇りをもって「大陸のアメリカ都市」を自称する。すべての人間関係の抽象性が、ゆえに非情性もまた、間断なく増大する。愛国主義は、近代的な、意識的要素を強く混ぜ合わせたナショナリズムに取って代わられる。ファシズム、ボルシェヴィズム、アメリカニズム、シオニズム、有色諸民族の運動において進歩は、これまでは考えられもしなかったであろう攻撃を開始する。(PP, S. 577f.)

¹⁰ 本稿後半部で示唆される無名兵士崇拜の批判を『総動員』の眼目として主張することを急ぐあまり本稿は、このエッセイにおける「進歩」概念検討の重要性を見逃そうとしていた。この点がやはり重要であるとする示唆を受けたのは、「第 114 回トーマス・マン研究会」(前掲) 席上での福元圭太氏、ならびに稲葉瑛志氏の発言による。

¹¹ ジョージ・L・モッセ(宮武美知子訳)『英霊——創られた世界大戦の記憶』、柏書房、2002年、9頁。

ソヴィエト連邦、イタリア、アタテュルク（ムスタファ・ケマル）治世下にラテン文字政策を進めたトルコが挙げられ、またユンガーがベルリンをそのあとに続けていることからドイツをそこに含めても、ここに挙げられている諸国はいずれも、後期資本主義の系譜において考えるならば後発の、「遅れた」国々であるといつてよいであろう。第一次世界大戦のずっと以前から漸進的に展開されてきた「進歩」の運動は戦時を経て戦後には、世界の隅々にまでゆきわたる。その運動が、いまや「有色諸民族」さえをも巻き込む規模で展開される。「進歩」はこの時、20 世紀のあらゆる「主義」、あらゆる運動を支えることが可能な、ほとんど唯一の原理となるのだ。「進歩」の理念の勢力伸張をこれほどまでに可能にしたのが、第一次世界大戦でその萌芽が見られた「総動員」なのである。

4. 「総動員」は達成されたか

上のようにユンガーによって取り出された「総動員」は、果たして参戦諸国においてどの程度達成されたのかを見てみよう。戦争と「総動員」の関係については、一般に次のように考えられているのではないだろうか。——第一次世界大戦は戦争当事国の持てる力のすべてが注ぎ込まれる総力戦の嚆矢であった。この点が、第一次世界大戦が画期的であった所以である。いずれの参戦国も、国力をすべて「動員」することに全力を傾注した。各国の全力が傾注され、また近代技術の粋を結集した新兵器の登場を見たからこそ、戦線はますます拡大し戦死者数もこれまでに類を見ないほどに増加した。——こうした理解は妥当であるように見える。しかしユンガーの見立てではそうはならないのだ。こと「総動員」に関して参戦諸国においては、その達成度に相当のひらきが見られるのである。結論からいえば、「総動員」を一定程度においてではあるが達成できたのは、自国ドイツではなく、敵国フランスであった。前章において、「潜在的エネルギー」の絶対的把握について論じた箇所、ユンガーの念頭にはフランスがあると書いたが、フランスの優位はこれと大いに関係がある。「総動員」の達成においてフランスはドイツの優位に立ち続けた。開戦当初の電撃的な先制攻撃から中盤以降は押し返されて膠着状態に陥るも、戦線ではフランスに引けを取っていなかったはずのドイツが、「総動員」についてはフランスに対して完全な劣勢にあったことにはどのような理由があるのか。ユンガーはこの点に関して読者に、まず以下のように注意を促している。

すでに先の大戦において重要だったのは、ある国がどの程度軍事国家であったか、あるいはなかったかということではなく、その国に、総動員に対する能力がどのくらい備わっていたかということである。(PP, S. 567)

「総動員」と「軍事国家」という用語をめぐる通常の観念においては、一国において「総動員」が強力に達成されればされるほどその国は軍事国家として高い完成度をもつと考えられるのではないだろうか。どの程度に「軍事国家であったか」という基準に照らして、ドイツがフランスに遅れをとるということはなかったはずである。しかし第一次世界大戦においては、軍事国家であるかどうかはもはや決定的な参照項ではなくなる。ユンガーは、「総動員」の能力を備えているかどうかが重要だというのである。この観点において、軍事国家であるかどうかと、「総動員」を達成できるかどうかは切り離されることになる。そしてこの「総動員」達成のための能力において、ドイツはある欠損を抱えていた。この点は、先に見たエッセイ『総動員』の中心課題と目されてきた「進歩」の運動の展開と深く関係している。1789 年以来、「進歩」を旗印にして国家を進行させてきたフランスは、ドイツとは異なり、19 世紀という時代のいわば申し子であったといってよい。「進歩」に対して全幅の信頼が寄せられていること。これが近代国家としてのフランスの存在意義であったといってよいだろう。だがとにかく「進歩」に関してはそれを「外国語」(PP, S. 570) としてしか取り扱うすべを知らず、「19 世紀の大人民教会」たる「進歩」への信仰が確立されていないドイツには、その進歩への信仰を必須条件とする「総動員」の達成は困難であった。この点についてユンガーは次のように書いている。

我々はただ、ドイツには、時代の精神——それがいかなる性質のものであったとしても——の提供が、今度の戦いでドイツに納得のゆくような援軍としてはついに拒まれたままだった、ということを知っているだけだ。まったく同様に、ドイツには、この精神にまさる原理を、みずからの意識の前にも世界の意識の前にも、有効なものとして提示することも拒まれたままだった。それどころか我々は、戦いに挑もうとする人間がじぶんの旗に縫い付けようと熱中するあのシンボルやイメージを、[ドイツの] 一方がロマン主義的で理想主義的な次元に、一方が理性主義的で唯物論的な次元に探しもとめる様子を目にする。しかしながら、これらの次元に宿っている、一方は過去に、一方はドイツ的天分にとってはなじみのない生命圏に属する有効性

では、人間と機械の投入に究極のレベルの決意を確保するには十分ではなかった。その決意こそは、世界全部に対する恐るべき闘いに、不可欠のものなのである。(PP, S. 571) ¹²

やや図式的すぎるくらいはあるが、一方は「ロマン主義的で理想主義的」であり、他方は「理性主義的で唯物論的」なふたつの側面を併せ持った、ネガティブに捉えればその二面に引き裂かれたドイツの 19 世紀の姿が適切に描かれている箇所であるといつてよいであろう。そしてこの二つの要素がドイツにとって、第一次世界大戦で要求され、それに応えねばならなかった戦いのためには、まったく不十分な要素として手元に残された材料であったのである。

5. 「秘密のドイツ」へ——無名兵士崇拜批判の検討に向けて

本稿が対象とする『総動員』のもうひとつの眼目、ユンガーがこのエッセイで提出を試みた要素を考察するための前提を示しておきたいと思う。考察の対象となるのは、第一次世界大戦の未曾有の大量死を前にして、戦後どのような生き方が可能であるかをユンガーがいかに思考したかである。

第一次世界大戦後、ヨーロッパ各地では無名兵士の崇拜が始まった。ベルギー、西フランドル地方ランゲマルク (Langemark) などの激戦地や各国の首都には多くの記念碑や戦没者墓地が建てられ、国民はこぞってその場所を訪れることになる。¹³ここで、無名兵士の評価としておそらくもっともよく知られた文章を見ておきたい。ベネディクト・アンダーソンによる無名兵士の墓についての定義だ。この箇所は、ユンガーの指摘する無名兵士を対象とする崇拜とはいかなるものかを考える際のヒントを備えており、無名兵士の崇拜 (とその批判) を考察するにあたり必須の洞察を含んでいる。

¹² この箇所には、初版と著作集版、全集版においていくらかの異同がみられる。引用文中の「世界全部」の原語は、eine ganze Welt であるが、著作集版、全集版ではともに、ganze は削除されている。また「決意」と訳した、Entschlossenheit は、ほかの二版では、Gläubigkeit に置き換えられている。著作集版 S. 139、全集版 S. 135 を参照。

¹³ ランゲマルクは、ソンム Somme と並んで第一次世界大戦の独仏間の戦闘において最大の激戦地だとされる地名である。ところが、激戦が繰り返りひろげられ、ドイツ軍に多数の死傷者が出たのは、実際にはランゲマルクではなくそこから西へ 5 キロ離れたビックショーツであったという。モッセは、激戦地としてランゲマルクが第一次世界大戦において象徴的な地位を獲得した理由は、その地名の「ドイツ的な」響きに求めている。(モッセ、前掲書、78 頁)

無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表象するものはない。これらの記念碑は、故意にからっぽであるか、あるいはそこにだれがねむっているのかだれも知らない。そしてまさにその故に、これらの碑には、公共的、儀礼的敬意が払われる。これはかつてまったく例のないことであった。それがどれほど近代的なことかは、どこかのでしゃばりが無名戦士の名前を「発見」したとか、記念碑に本物の骨をいれようと言いはったとして、一般の人々がどんな反応をするか、ちょっと想像してみればわかるだろう。奇妙な、近代的冒瀆！ しかしこれらの墓には、だれと特定しうる死骸や不死の魂こそないとはいえ、やはり鬼気せまる国民的想像力が満ちている。（これこそ、かくも多くの国民が、その不在の住人のナショナルイデオロギイを明示する必要をまったく感じるものがない理由である。[そこには] ドイツ人、アメリカ人、アルゼンチン人……以外、だれがねむっている。）¹⁴

死者は無名であるがゆえに公共的敬意の対象となるという点が重要である。無名兵士の墓と碑が、ネーションの感情を受け止める役目を果たすわけだ。無名兵士は無名であることによって、国民にとってどのような装置となるか。戦死者は、無名であることによって、彼が所属していた共同体に生きる人々すべてにとって接近可能な開かれた存在になるということである。無名兵士が顕彰されたのは、戦勝国においてではなかった。無名兵士を頌える跡地で展開された光景をユンガーは、さながら「観光産業」¹⁵のようだと述べている。この観光産業化した無名兵士崇拜に対する異論が『総動員』のもう一点の主要なモチーフへとつながる。そしてこのモチーフは、本稿で確認してきた、戦争論として高い評価を同時代に受け、また現在も同様の評価を獲得している『総動員』の主題とは別のカテゴリーに属すものである。本稿の冒頭でユンガーの作品系譜における削除の問題に言及した。従来『総動員』に与えられてきたこのエッセイが優れた戦争論であるという評価を受けた箇所は、初版から著作集版、全集版を通じていずれの版にも収録されており削除されていない。しかし、『総動員』の主題として欠かせないと思われる無名兵士崇拜批判が展開される場所は、本

¹⁴ ベネディクト・アンダーソン（白石隆／白石さや訳）『定本・想像の共同体』、書籍工房早川、2007年、32頁。強調原文。

¹⁵ Ernst Jünger: Die Lebenden und die Toten. In: Ders.: Politische Publizistik 1919-1933. Hrsg. v. Sven Olaf Berggötz. Stuttgart (Klett-Cotta) 2001, S. 416.

稿冒頭にも述べたように著作集版以降の版には収録されていないのだ。

作品としての『総動員』には、戦争論としての側面と、無名兵士崇拜に対してユンガーの上げた抗議の声という側面との二つがあるのだが、以下の引用箇所には、後者のモチーフが最大限に表現されている。

どのような理想のために戦ったのだとしても、戦士たちは讃えられてあれ！ しかし、我々がこのような無名兵士の崇拜に加わろうとするならそれは、我々が現に存在すると信じている秘密のドイツへの裏切りを意味するのではないか。〔中略〕この秘密のドイツにおいて、長きにわたって初めて、世界史的意義を備えた形姿が再び育つのだ。秘密のドイツにおいて、普遍的なるものは動きを止め、我々をヨーロッパから隔てる遮断機が降りようとしている。(PP, S. 579)

普遍をどうやって獲得するか、いかにして普遍に近づくかが（フランス革命以後の）近代ドイツの課題であったことを考えると、ここでのユンガーの提言は、かなり挑戦的に映る。無名兵士をどう捉えるかは、ユンガーのテキスト自体がはらむ問題をも明らかにする。ユンガーは、自身の提出した *Gestalt* のひとつとして「無名兵士」を挙げることもあるからだ。¹⁶それゆえこの箇所は、無名兵士の取り扱いについてのユンガー自身の振幅が観察される場所でもある。やはり問題は、「無名兵士の崇拜」（強調引用者、原語は *Kult*）という箇所にあるのかもしれない。上に引用した箇所は、『総動員』というエッセイのもつまざまな問題を喚起する。と同時に、この作品の読者としてのわれわれにいくつもの

¹⁶ 引用文中に「世界史的意義を備えた形姿」という表現が見える。ユンガーは後年、1951年のエッセイ『森のみち *Der Waldgang*』で、無名兵士について形姿 (*Gestalt*) との関連で以下のように述べている。「(形姿としての労働者に) 続いて他の形姿が姿を現す。〔中略〕これらの形姿のひとつがあの無名兵士だ。この名前を持たぬ者は、まさに名前を持たないというそのことによって、すべての首都だけではなくて、あらゆる村、どんな家族のなかにも生きているのである。〔中略〕無名兵士はいまなお英雄であり、火の世界の征服者だ」。

(Ernst Jünger 2002 [1951], S. 301f.) ここには、先に引用したアンダーソンが展開する無名兵士の定義と同様の洞察があるといえるだろう。ユンガーは続けてこの無名兵士を、彼の提示する三つの形姿のひとつに数え上げる。「我々は労働者と無名兵士を現代の重要な形姿のふたつと名付けた。この森をゆく人のなかに我々は三つ目の形姿を認めるのであるが、この三つ目の形姿はいまや一層はっきりと姿を浮かび上がらせようとしているのである」(Ebda., S. 306, 強調原文)。これらの箇所からは、ユンガーの思惟における「無名兵士＝労働者＝森をゆく人」の三つの形姿をめぐる新たな問題が浮上する。これにはについては本稿の課題の範囲を超えているので別稿にて論ずる。

読解可能性を呈示しもするのである。

上の引用文中でユンガーがいささか唐突にその到来を宣告する「秘密のドイツ」(das geheime Deutschland) とは何であるか。¹⁷「秘密のドイツ」は、シュテファン・ゲオルゲの詩作品 *Geheimes Deutschland* との関係がうかがわせるに十分である。「[第一次世界＝引用者註] 大戦のころから最も重要なことを告白するのに geheim という言葉を使っ」¹⁸たというゲオルゲがこの作品を書いたのはすでに第一次世界大戦中であるが、発表されたのは制作から 10 年が経過したあとのことである。¹⁹本稿を締めくくるにあたり、この言葉とユンガーとの関連についてここで予期を述べておきたい。第二次世界大戦中ユンガーは、プロイセン軍人の最高勲章「プール・ル・メリット」を史上最年少で受勲するという華々しい栄誉が最後を飾った第一次世界大戦でのほぼ四年に渡る従軍とは違って、ドイツ国防軍参謀本部付き将校として前線ではなくおもにパリに駐在した。パリでは、1944 年 7 月 20 日のヒトラー暗殺計画に連座して処刑されたカール＝ハインリヒ・フォン・シュトゥルプナーゲル將軍ら国防軍内の反ナチ党勢力との親交を深めた。決行後失敗に終わったヒトラー爆殺計画は、パリの反ヒトラー勢力と親交の深かったユンガーの進退にも大きな影響を与えることになる。ユンガーは軍内部の抵抗勢力との関係を疑われ、不名誉除隊をもって第二次世界大戦での軍務を解かれることになる。ヒトラー爆殺未遂の直接の実

¹⁷ ユンガーは同じ箇所での「秘密のドイツ」を、「もうひとつの国」(ein anderes Reich) と言い換えてもいる。こうした言い方は、第一次世界大戦でのドイツの敗戦の原因を国内勢力の裏切りに帰す「背後からのひと突き」伝説に代表される右派勢力の言説に似せて見せる。「ヴァイマル共和国」期の右翼勢力の言説とユンガーの主張する新ナショナリズムとの相関・離反関係については、糸瀬 2013、とくに 29-33 頁を参照。

¹⁸ 八木浩「ゲオルゲのドイツ讃歌」、『ドイツ文学』第 17 巻、1956 年、38 頁。ゲオルゲが（あるいはユンガーも）本来どのような意図をもって「geheim」を用いたかに拘わらず、あるいはゲオルゲの使用法いかに拘わらず、「geheim」あるいは、*Geheimes Deutschland* をどのような日本語にするかには、大変な困難が伴う。国立情報学研究所「学術研究データベース・リポジトリ」中の日本独文学会文献情報データベースにおいて前掲八木論文に「注記」として付されているドイツ語タイトルは、*„Geheimes Deutschland“ von Stefan George* となっている。このドイツ語タイトルを当該論文の筆者である八木自身が付けたのだとすれば、「geheim」の部分にはいわば目をつぶってそれを「讃歌」に吸収させているわけである。これはじつに思い切った方法でありながら、ことゲオルゲのこの詩作品については、あながち不当な扱いであるとも思われない。訳出にあたって一層難しいのは、『総動員』における *das geheime Deutschland* の訳語であろう。「geheim」には、「秘密の」「秘められた」「隠された」「表面からは目に見えない」などのほか、「アットホームな」「身内だけの」「打ち解けた」などの意味合いも含まれるであろう。公刊されている既訳（エルンスト・ユンガー（川合全弘編訳）『総動員』、『追悼の政治』、月曜社、2005 年、35-79 頁、ここは 72 頁）である「秘められたドイツ」を参照した。

¹⁹ 八木、前掲所。

行者であるクラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐 (Claus Schenk Graf von Stauffenberg, 1907-1944) とユンガーとの間に直接の関係を証明する資料はない。²⁰また、Geheimes Deutschland や ein anderes Reich という言葉は、すでに第一次世界大戦後の標語となり青年層に影響を与えた das dritte Reich (第三の^{くに}国) を連想させるものである。²¹すなわち、この一連の用語は、それがいつ用いられるかによって意味合いを変えるということがあるのだ。Geheimes Deutschland にせよ、ein anderes Reich にせよ、das dritte Reich にせよ、それが第一次世界大戦後の「ヴァイマル共和国」において用いられるのか、あるいはナチ党の政権獲得年である 1933 年以降に用いられるのかによって、その意味合いを大きく変えるのである。²²

ユンガーはこのエッセイのクライマックスにおいて「秘密のドイツ」の到来を宣告し、その国に到達するには当時ヨーロッパに流行していたかたちでの無

²⁰ クラウス・シュタウフェンベルクがゲオルゲの弟子の一人であり、またゲオルゲの遺言状執行者となった兄ベルトルトの後継者であったこと、またヒトラー爆殺事件の失敗後に逮捕されベルリンで銃殺刑に処される直前にクラウスが叫んだとされる言葉 (Lehmann 1979, S. 194; Riedel 2014, S. 11 など) によれば „Es lebe unser heiliges Deutschland!“ あるいは „Es lebe unser geheimes Deutschland!“ の二つのバージョンがあるがそのどちらであるにせよ) からは、「秘密のドイツ」をめぐるゲオルゲ、ユンガー、シュタウフェンベルク (兄弟) のラインも浮かんでくるが、この三者の連関を論じることはさしあたり本稿の課題の範囲を超えている。第二次世界大戦直後、イギリス軍占領地域に住んでいて著作公刊禁止の措置を受けたユンガーは、フランス軍占領地域に属していたドイツ南西部の小村 Wilflingen に移住することになる。この地は、ヒトラー暗殺未遂事件に加担したシュタウフェンベルク大佐 (伯爵 Graf) とは異なる系譜のシュタウフェンベルク家 (男爵 Freiherr) の領地であり、この村の中心に位置するシュタウフェンベルク城 (Schloss と呼ばれるが館程度の大きさ) がユンガーの住居として提供されていたこともあって、ユンガーの名前とセットで語られるのが通例になっている。この村でユンガーは、50 年を超えるその後の半生のすべてを過ごした。ゲオルゲとユンガーとの影響関係は、ドイツにおける文学者と政治体制との関わりの探究という意味からも重要な問題をはらんでおり、今後解決されるべき課題である。

²¹ メラー＝ファン＝デン＝ブルックの Das dritte Reich の出版が 1923 年である。das dritte Reich に「第三の国」という訳語をあてたのは、「第 114 回トーマス・マン研究会」(前掲) 席上における小黒康正氏の発言に示唆を受けてのことである。

²² ペーター・ホフマンは、ゲオルゲ・クライス内における「秘密のドイツ」使用の起源を、1910 年のカール・ヴォルフスケールのエッセイに見出している。それによればこの言葉はヴォルフスケールによって、ゲオルゲの思想の説明のためと、『『芸術草紙』への寄稿者およびその「排他的な招待読者」を形容するのに用いられた。(ホフマン『ヒトラーとシュタウフェンベルク家』、60 頁) しかし、「秘密のドイツ」概念は、すでに 1800 年頃の国民運動に起源を探ることができ、19 世紀全般をとおしてその伸張が観察できるようだ。その系譜には、賛歌「ドイツの歌」と「ゲルマニエン」を書いたヘルダーリン、シラー、フリードリヒ・ヘッペル、ハイネ、パウル・ド・ラガルド、ヘッペルの影響を受けたユリウス・ラングベーンが連なるとされ、ゲオルゲはこれらの作家の作品に親しんでいた。(ホフマン、同書、58-59 頁参照)

名兵士への崇拝は無効であるという警鐘を鳴らした。なぜ無名兵士崇拝では「秘密のドイツ」にゆきつくことはできないのか。そもそも死者の無名性とはどのようなものか。戦死者が無名であることは何を生み出すのか。ユンガーからの批判は、先に引用したアンダーソンの文において示唆された「国民的装置としての無名兵士」という概念と大に関係がある。並びに無名兵士の崇拝が近代国家一般の事象（事業）であることも関連がある。『総動員』においてユンガーが展開する無名兵士崇拝批判が、このエッセイが発表された当時どのようなメッセージを持ち得たのかをさらに継続して検討する必要がある。その理由は、大きくわけて二つある。一点目は戦没者や英雄の記念碑および墓が、それぞれの共同体や社会にとってつねに大きな問題であり続けていることは、現在の世界を見渡しても明らかであるからであり²³、こうした問題を見ずして共同体間（国家間）の軋轢やあるいは共同体内部の対立は解消されないということである。二点目は、狭義の戦争論の枠を超えて展開されるこの無名兵士崇拝批判が、『総動員』という文章の思想的意義を保証すると考えられるからだ。

23 本稿を準備した 2017 年には、英雄の墓をめぐる騒動がアメリカで、次いで中国で持ち上がった。アメリカ南北戦争で総司令官として南軍を率いたロバート・E・リー将軍の記念碑が人種差別主義の象徴であるから撤去せよという運動が起こり、これに反発する「クー・クラックス・クラン（KKK）」とその支持者らがデモ行進を行なった。ドナルド・トランプ大統領の誕生とともに高まったオルタナティブ右翼運動とも連動したこのデモ行進に対して、数百人がカウンター・デモを実施。「レイシストは帰れ！」などと抗議の声を上げた。（「AFP」<http://www.afpbb.com/articles/-/3135057> 参照。最終閲覧日 2018 年 2 月 18 日）同じ月に中国では、7 月 13 日に死去した民主化活動家の劉曉波が火葬され、その後大连市沖で散骨された。毎日新聞はこの海への散骨について、「死亡する直前まで投獄してきた中国に対し各国から非難が強まる中、早期に幕引きを図るとともに民主化運動の「聖地」になりかねない墓を造らせない中国政府の思惑があるとみられる」と伝えている。

（WEB 版『毎日新聞』2017 年 7 月 15 日 23 時 27 分（最終更新 7 月 16 日 18 時 05 分）<https://mainichi.jp/articles/20170716/k00/00m/030/132000c> 参照。最終閲覧日 2018 年 2 月 18 日）死者の骨が国民の思いが集まる対象になり得るという意味で、劉曉波の死後の火葬と散骨の処置は極めて示唆的である。国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑には無名兵士の遺骨およそ 36 万柱が納められているが、墓苑の中核を占める六角堂には、昭和天皇御製の納骨壺が置かれ、その中には遺骨を代表する一体の「象徴遺骨」が納められている。遺骨一体を選び出して「象徴」とする無名戦没兵士の取り扱い、パリ凱旋門の下に埋葬されている無名兵士に対するそれと同様である。どの立場の国民にも、その無名の死者との関係を結ぶことを可能にする装置が完成するのである。横光利一がパリ滞在時に観察し『旅愁』（1937-46）に記した右翼勢力と左翼勢力による無名兵士の墓をめぐる闘争は、この装置の効果を適切に描いているといえるだろう。この「無名の効用」については、続稿にて詳細に考察したい。

--主要参考文献--

- Anderson, Benedict: Imagined Communities. Reflections on the Origin and Spread of Nationalism. London/New York (Verso) 2006 [1983], Revised Edition.
- アンダーソン, ベネディクト (白石隆・白石さや訳)『定本・想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早川、2007 年。
- 有田英也「戦争の世紀とモダニズム——ユンガー、セリーヌ、ドリュ・ラ・ロシェル」、小森陽一 (編)『岩波講座 文学 10・政治への挑戦』、岩波書店、2003 年、179-201 頁。
- Auffarth, Christoph: Das „Dritte Reich“-das „Geheime Deutschland“. Stefan George im Kontext. Thesen. In: Wolfgang Braungart (Hrsg.): Stefan George und die Religion. Berlin/Boston (De Gruyter) 2015, S. 157-174.
- Benjamin, Walter: Theorien des deutschen Faschismus. Zu der Sammelschrift »Krieg und Krieger«. Herausgegeben von Ernst Jünger. In: Ders.: Gesammelte Schriften. Hrsg. v. Rolf Tiedemann u. Hermann Schweppenhäuser, Bd. III, Frankfurt a.M. (Suhrkamp), 1981, S. 238-250.
- Bolz, Norbert: Auszug aus der entzauberten Welt. Philosophischer Extremismus zwischen den Weltkriegen. 2. unveränd. Aufl. München (Fink) 1991.
- Brekke, Wolfgang: Das Unbehagen Ernst Jüngers an der Nazi-Herrschaft. In: Weimarer Beiträge 40. 1994, S. 335-349.
- Breuer, Stefan: Carl Schmitt im Kontext. Intellektuellenpolitik in der Weimarer Republik. Berlin (Akademie Verlag) 2012.
- ホフマン, ペーター (大山晶訳)『ヒトラーとシュタウフェンベルク家——「ワルキューレ」に賭けた一族の肖像』、原書房、2010 年。
- 本間茂樹「解説」、『国家総動員法』第 1 巻、日本図書センター、1989 年、1-5 頁。
- 今井敦「ユンガー兄弟の技術論——「総動員 / 総流動化 (die totale Mobilmachung)」概念を軸として」、『ドイツ文学』148 号、2013 年、56-70 頁。
- 糸瀬龍「エルンスト・ユンガーの〈新〉ナショナリズムについて」、『METROPOLE』34 号、2013 年、1-52 頁。
- Jünger, Ernst: Die Lebenden und die Toten. In: Ders.: Politische Publizistik 1919-1933. Hrsg. v. Sven Olaf Berggötz, Stuttgart (Klett-Cotta) 2001, S. 413-420.
- Jünger, Ernst: Die totale Mobilmachung. In: Ders.: Politische Publizistik 1919-1933. Hrsg. v. Sven Olaf Berggötz, Stuttgart (Klett-Cotta) 2001, S. 558-582.
- Jünger, Ernst: Die Totale Mobilmachung. In: Ders.: Werke in zehn Bänden. Bd. 5. Essays I. Stuttgart (Ernst Klett Verlag) 1960-1965, S. 123-147.

Jünger, Ernst: Die Totale Mobilmachung. In: Ders.: Sämtliche Werke in zweiundzwanzig Bänden. Zweite Abteilung. Bd. 7. Essays II. Stuttgart (Klett-Cotta) 2002 (2. Aufl.), S. 119-142.

Jünger, Ernst: Der Waldgang. In: Ders.: Sämtliche Werke in zweiundzwanzig Bänden. Zweite Abteilung. Bd. 7. Essays II. Stuttgart (Klett-Cotta) 2002 (2. Aufl.), S. 281-374.

ユンガー, エルンスト (川合全弘訳) 「生者と死者」、『産大法学』第 36 巻 3 号、2003 年、30-39 頁。

ユンガー, エルンスト (川合全弘訳) 「総動員」、エルンスト・ユンガー (川合全弘編訳) 『ユンガー政治評論選』、月曜社、2016 年、79-120 頁。

川合全弘「エルンスト・ユンガーにおける追悼論の変遷」、エルンスト・ユンガー (川合全弘編訳) 『追悼の政治』、月曜社、2005 年、163-199 頁。

Kiesel, Helmut: Ernst Jünger. Die Biographie. München (Panttheon) 2009.

『国家総動員法第 1 巻』(底本: 企画院 (編) 『国家総動員法令集』、日本図書センター、1989 年。

Lehmann, Peter Lutz: George und Stauffenberg. In: Peter Lutz Lehmann / Robert Wolff: Das Stefan-George-Seminar 1978 in Bingen am Rhein. Eine Dokumentation. Hrsg. v. der Gesellschaft zur Förderung der Stefan-George-Gedenkstätte im Stefan-George-Gymnasium Bingen e.V., Heidelberg (Lothar Stiehm) 1979, S. 185-195.

Martus, Steffen: Der Krieg als Poesie. Ernst Jüngers „Manie der Bearbeitungen und Fassungen“ im Kontext der „totalen Mobilmachung“. In: Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 44, 2008, S. 212-234.

Mohler, Armin: Die Konservative Revolution in Deutschland. 1918-1932. Stuttgart (Friedrich Vorwerk) 1950.

モッセ, ジョージ・L (宮武美知子訳) 『英霊——創られた世界大戦の記憶』、柏書房、2002 年。

Riedel, Manfred: Geheimes Deutschland. Stefan George und die Brüder Stauffenberg. Berlin (Kulturverlag Kadmos) 2014.

Schwillk, Heimo (Hrsg.): Ernst Jünger. Leben und Werk in Bildern und Texten. Stuttgart (Klett-Cotta) 1988.

Sontheimer, Kurt: Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933. München (Nymphenburger) 1968.

内田源兵衛『逐條解説 国家総動員法〔増補〕』、日本評論社、1939 年。

Vondung, Klaus: *Magie und Manipulation. Ideologischer Kult und politische Religion des Nationalsozialismus*. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1971.

八木浩「ゲオルゲのドイツ讃歌」、『ドイツ文学』第 17 卷、1956 年、38－42 頁。